

魅力的な道徳の授業を進める指導の工夫

生駒市立上中学校 教諭 石本 吉孝

Ishimoto Yoshitaka

要 旨

魅力的な道徳授業を進めるためには、生徒の積極的な参加が必要不可欠である。生徒が主体的に取り組む道徳の時間を目指し、①話し合い活動を工夫すること、②体験活動との関連を図ることの2つの視点から指導の在り方や工夫について考察した。

キーワード： 道徳の時間、話し合い活動、体験活動

1 はじめに

道徳の時間は、道徳の教育の要として、一人一人の生徒が自らの人間としての生き方について、自己と向き合いながら考えを深めていく時間である。そんな道徳の時間を充実したものにするためには、道徳の時間が生徒自らが主体的に学べる学習にすることが大切である。

しかし、各教科の授業時には積極的に挙手し発言していた生徒が、道徳の時間になると自分の意見をなかなか言えず、指名されても表面的な受け答えに終始してしまうなど、なかなか生徒一人一人の思いが深まらないといった課題がある。そこで、まず、自分の思いや本音をしっかりと出し合える話し合いをさせたいと考えた。また、生徒たちが学校で共通に体験したことを基に考え合えるよう、体験活動と道徳の時間とを関連付ける工夫をした。

これら2つの視点から、魅力ある道徳の時間をつくっていきたいと考えた。

2 研究目的

生徒が主体的に考えることのできる道徳の授業づくりを目指し、指導の在り方や具体的な指導の工夫について考察する。

3 研究の視点

(1) 道徳の時間における話し合い活動の工夫

生徒たちの話し合い活動を振り返ると、自分の思いを素直に述べたり、授業の中で本音を出すことがなかなかできなかった。発言することを恥ずかしいと考える生徒もおり、話し合いがなかなか深まっていけない。道徳の時間においても同じである。生徒は道徳資料に書かれていることをそのまま答え、それ以上は意見が出ずに1時間が終わってしまう。

道徳的な心情、実践意欲や態度などを育てることをねらいとしている道徳の時間では、生徒たちが思いや考えを活発に交流させることが必要である。相手の思いを聞くことで、「自分と同じだなあ。」と共感したり「あんな考え方もあるんだ。」と気付かされたりしながら、さらに自分の考えを深め、道徳的価値を理解し、自覚することにつながっていくからである。

このような授業こそ、次も生徒が考えてみたくなるような道徳の授業であろう。そのための話し合い活動の在り方・工夫について研究する。

(2) 道徳の時間に体験活動を生かす

平成18年2月の中央教育審議会教育課程部会による「審議経過報告」では、体験の意義について、「体験は、体を育て心を育てる源である。子どもには生活の根本にある食を見直し、その意義を知るための食育から始まり、自然や社会に接し、生きること、働くことの尊さを実感する機会を持たせることが重要である。」としている。

生徒は、様々なことに出会い、いろいろなことを感じたり考えたりしている。日常生活の一こま一こまが生徒の体験として、生徒一人一人に積み重ねられていく。体験を生かした道徳の授業とは、生徒がその体験を思い起こしながらねらいとする道徳的価値を自分とのかかわりでとらえ、自分自身と結び付けながら考えることのできる授業である。

しかしながら、生徒の体験には個人差がある。例えば「勤労」について考えるとき、商店を営んでいる家庭に育った子と、サラリーマンの家庭の子どもとでは、親の労働に触れる体験には差があるであろう。新興住宅地の中にある本校では、「勤労」にかかわる体験をほとんどしていない生徒も多いように思われる。このような状況では考える基となる体験が不足していたり、個人差が大きすぎたりして、一人一人の思いを深め合うような道徳の授業は進めにくい。

学校における体験活動は、「共通の体験」として、感じ方の差こそあれ、全ての生徒が体験するものである。そこで、こういった体験を基にして考え合うことで、思いや考えを出し合い深め合う魅力的な道徳の授業が進められると考える。

4 研究の内容

上記の2つの視点から、実際の道徳の時間の授業づくりを通して、指導のポイントや具体的な指導の工夫について考察した。

(1) 話し合い活動を工夫した道徳の授業

ア 活動工夫のポイント

① アンケートの実施

事前に生徒全員に授業のテーマにかかわるアンケートを取り、授業の導入時にその結果を基に話し合うようにすることで、学習に対する興味・関心をもたせ、意見を出しやすくした。

② ワークシートの活用

生徒一人一人が自分の考えを整理したり、じっくりと考えを深めたりできるようにするため、主発問等に対応したワークシートを活用した。そして、ワークシートを基に話し合うことで活発に意見を出せるようにした。

③ グループ討議の活用

学級全体で話し合うと、恥ずかしくて本音が出せない生徒や、「勘違いした発言をしたらどうしよう。」と考え躊躇してしまう生徒、また、「発言について周りからからかわれ浮いてしまうのでは」と考える生徒が多い。そこで小グループに分かれて話し合い活動を行い、どの生徒も考えを出せるようにした。その後、グループ間の意見交流を図る形で中心の話し合いを進めた。

イ 授業の概要

- 主題名 生命の尊重 3-(2)

資料名 命をみつめて 猿渡瞳さんの646日(「生きる力」2 大阪書籍)

- ねらい 瞳さんが最期まであきらめずに生きようとしたのはどうしてだろうか、ということを考え合うことを通して、限りある生命を精一杯に生き、自他の生命を大切にしようとする

る心情を高める。

○ 展開

	学習活動	主な発問	指導上の留意点	備考
導入	1 今日 の学 習に ついて 考 える。	○ 「本当の幸せ」で一番多かった回答は何だと思いますか。	・本資料を読む前に2年生の生徒に質問して集計し結果を模造紙に書き、黒板に掲示する。 ポイント①	アンケート結果をまとめた模造紙
展開	2 資料を 読んで話 し合う。	○ 瞳さんはがんの告知をされたときどんな気持ちだったのだろうか。 ○ 瞳さんはどんな気持ちで闘病生活を送ったのだろうか。 ◎ 瞳さんが最後の1日まであきらめずに生き抜いたのはどうしてだろうか。	・ワークシートに書き込み、それをもとに話し合わせる。ポイント② ・グループで話し合わせ、その意見を短冊に書き黒板に掲示し、グループ間の意見交流を図る。ポイント③	ワークシート 短冊
展開	3 自分を 振り返る。	○ あなたは瞳さんからどんなメッセージを受け取りましたか。	・自分と向き合っ、じっくり考えられるよう、ワークシートに記入させる。	ワークシート
終末	4 授業を 振り返る。	○ 「本当の幸せ」って何だろう。		

ウ 考察

道徳の時間の導入では、「本当の幸せとは何か？」のアンケート結果について、どんな回答が多かったかなどを考えさせた。ある女子生徒は、「泳いでいるときに幸せである。」と、いった趣旨の発言をしたが、彼女は幼少から水泳を始め、ジュニアオリンピック選手にも選考された実力をもっている生徒である。彼女が「自分の本当の幸せ」と「自分が日々取り組み努力していること」とを重ね合わせていたことが分かる。アンケート結果を、クイズ形式や図表で提示したことで、生徒の発言に対する意欲を高めることができた。

展開では、資料を通した話し合い活動の中でワークシートを活用した。ワークシートに一度書くことで自分の考えをまとめることができ、活発な発言や話し合い活動につながった。

主発問の後、小グループ別に話し合い活動を行った際は、どのグループも初めは、

- ・ 病気に負けたくないから。
- ・ 頑張っ生きていたいから。
- ・ 病気が治ると信じていたから。

など、主人公の気持ちを感じ取った意見が多く出されたが、話し合いを進めていくにつれ、

- ・ 支えてくれる人がいたから。
- ・ 家族のために。
- ・ 支えてくれた人に将来恩返しをしたいから。

など、主人公を支えてくれていた人たちに目を向けた意見が出るようになった。自分が生きているのは自分の力だけでなく、家族など自分を支えている人のおかげであることに気付くことができたが、これなどはグループで考え意見交流した成果であると考えられる。

その後、展開後段で、自分と向き合っ考える際にワークシートを活用した。「あなたは瞳さん



(グループ別話し合い活動)



(グループの意見を掲示している様子)

からどんなメッセージを受け取りましたか。」の発問に対しては、

- ・ やり直しのできない人生を大切に生きて。
- ・ 生きているということは、どんなものにも負けないくらいすばらしいこと。

など「命の有限性」を取り上げた内容が多く、授業のねらいに即した結果となった。

終末には、「心のノート」を開き、生命の有限性について記してある内容を読むことで、一度しかない命を大切にしていこうとする気持ちを更に深め、温められるようにした。

5 あなたは天国にいる誰さんからどんなメッセージを受け取りましたか？<心のノートにはりましよう>

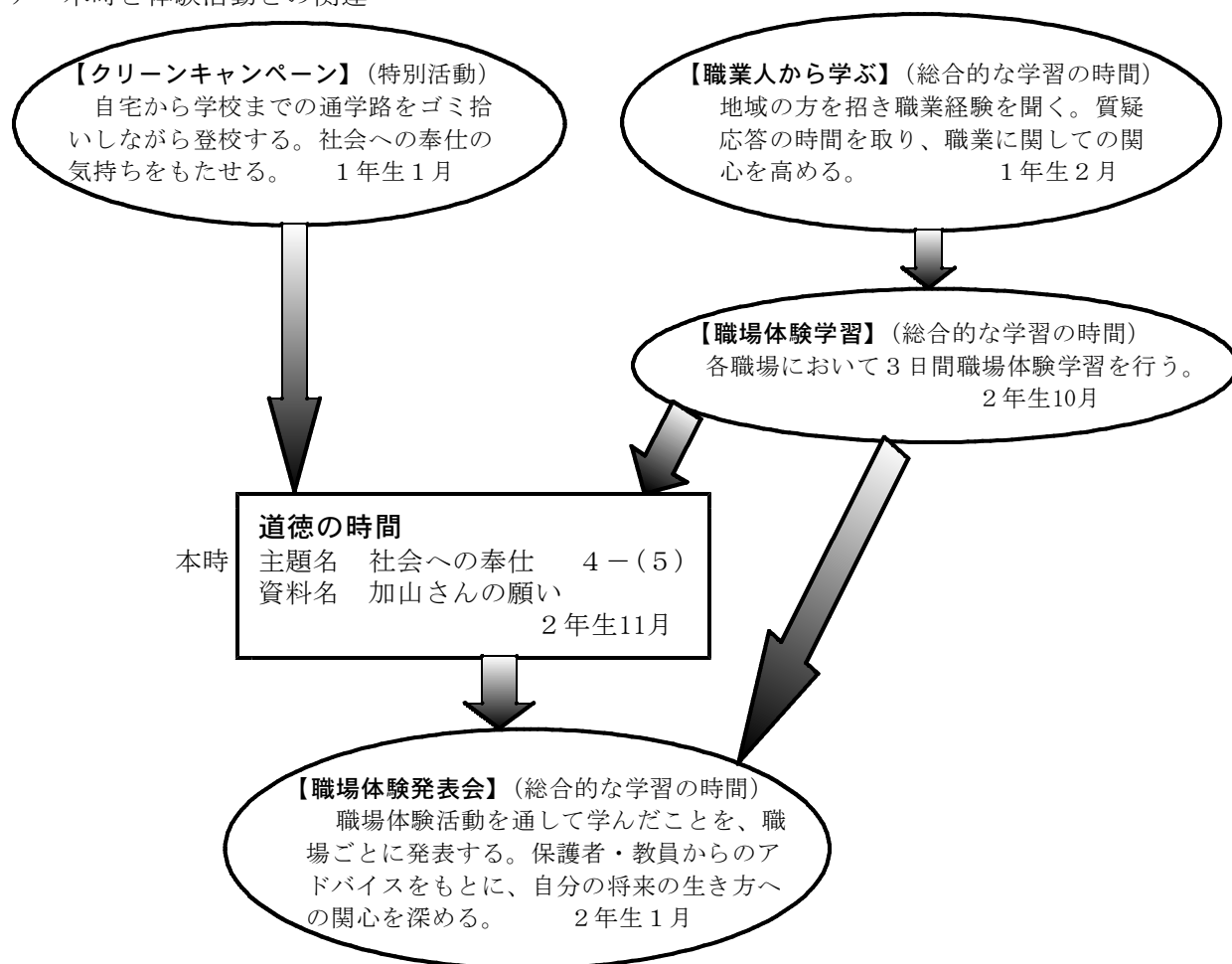
多くの人の苦しみは、体験しないとわからない。
でも、生きるこの出来が、た人の分まで精いっぱい、
生きて生きるこの「幸せ」を考えることは出来るので、
老、生きる「幸せ」を味わってほしい」ということ。

(展開後段でのワークシートの書き込み)

(2) 体験活動を生かした道德の授業

生徒たちは、入学以来ボランティア活動や総合的な学習の時間などにおいて「勤労・奉仕」にかかわる体験活動を行ってきている。これらの体験を生かして、道德の時間を構想した。下の図は、道德の時間と体験活動との関連図である。

ア 本時と体験活動との関連



イ 体験活動を生かす工夫

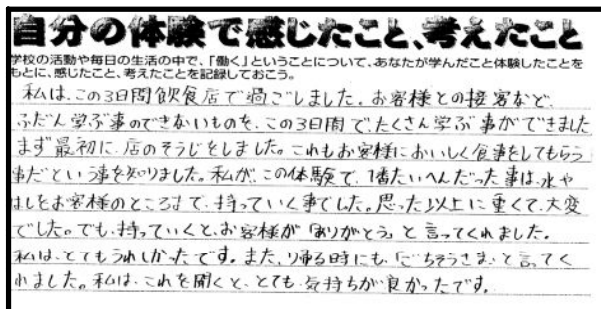
① 職場体験学習の充実

2年生の2学期に行う職場体験学習に向け、1年生の2月に社会で活躍している方をゲストティーチャーに招いて学習会を行い、勤労に対して意欲・関心を高める取組を行った。また、2年生の1学期に職場希望アンケート実施し、生徒一人一人が、できるだけ希望の職場で体験できる

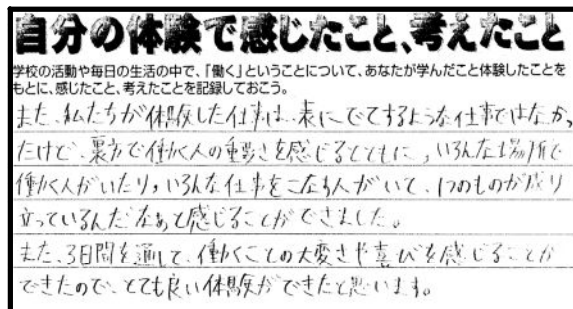
よう調整した。体験後には、事業所にお礼状を書く活動や体験活動発表会を通して体験を振り返らせるなど、職場体験当日だけでなくその前後の取組も含めて、「勤労」について生徒が思いや考えを深められるようにした。

② 「心のノート」の活用

3日間の職場体験活動後のまとめとして、「心のノート」100ページ「自分の体験で感じたこと、考えたこと」に記入させた。



(「心のノート」の書き込み例)



(「心のノート」の書き込み例)

記入された生徒の感想には、ただ体験をしてきただけではなく、「働いてくれている両親への感謝」「働くことのつらさや意義」「よりよいものを創り出そうとしている人への尊敬」など、道徳的価値にかかわる視点からの気づきが記されていた。これは、「心のノート」が道徳の内容項目を窓口として構成されており、職場体験を「勤労の大切さ、尊さ」という側面から振り返ることができたためだと考える。つまり、「心のノート」を活用することで、体験を通して感じたことや考えたことを道徳的価値として理解を深め、自覚へとつなげていくことが期待できるのである。

また、道徳の時間においても、このページを基に共通体験として振り返らせ、それぞれの考えを交流し合うなど、話し合いの活性化につなげたいと考えた。


ウ 授業の概要

- 主題名 社会への奉仕 4-(5)

資料名 加山さんの願い 文部科学省『中学校 読み物資料とその利用—主として集団や社会とのかかわりに関すること—』より

- ねらい 社会への奉仕の気持ちを深め、進んで公共の福祉のために尽くそうとする意欲を高める。また、働くことが自分のためだけでなく、社会へ貢献していることに気付かせる。

○ 展開

	学習活動	主な発問	指導上の留意点	備考
導入	1 今日の学習について考える。	○ 「働くことがもっている大きな意義」はなんだろうか。	・「心のノート」p.99を拡大し生徒に示す。  ポイント② (心のノートの写真)	写真
展開	2 資料を読んで話し合う。	○ 「いらぬ世話はしないでくれ」と中井さんに言われたときの加山さんの気持ちはどうだったのだろうか。 ○ 田中さんに「すみませんね」と申し訳なさそうに礼を言われたときの加山さんの気持ちはどうだったのだ	・資料の「むっと」や「腹立たしい」など加山さんが腹立たしく思う気持ちに共感させるようにする。 ・資料の「よいことをしているんだなあ」から加山さんの満ち足りた気持ちに共感させるように	

展 開	3 自分を振り返る。	◎ 加山さんが「田中さんに謝らなければならない。」と考えたのはなぜだろう。 ○ 多くの人のために、自分の力を出している人と出会ったことがありますか。	する。 ・資料の「世話をしてあげている」や「自分だけがいい気分になっていた」に注目させる。 ・「心のノート」p.100を開かせ、職場体験後に記入させた内容を確認させる。 ポイント①, ②	「心のノート」
終 末	4 教員の話聞く。		・「働く」ことは自分のためだけにではなく、社会に貢献していることに気づかせる。	

エ 考察

職場体験学習の充実を図ったことで、道徳の時間の話合いにその体験で感じたことや考えたことが生かされ、多くの生徒の活発な発言がみられた。資料は、ボランティアをテーマとしており、職場での体験を振り返りながら、多くの生徒が働くことで人の役に立った喜びを改めて感じていた。幼稚園に行った生徒が、「園児の前で絵本を読んだとき、園児から喜んでもらえて嬉しくなった。」と発言するなど、働くことが単に自分のためだけでなく、社会に役立っていることに考えが広がり、より勤労観を深めることにつながったと考えている。

また、「心のノート」を活用して、職場体験等で感じたこと考えたことを振り返らせたが、そのことによって、生徒はより実感をもって考えることができたようであった。また導入で、「心のノート」の写真を提示し、「働くことの意義とは？」という本時の学習課題をもたせたことも活発な話合いにつながったと考える。

5 おわりに

魅力的な道徳の授業づくりについて研究を進めてきたが、生徒が誰でも自分の率直な意見を発表できること、お互いの意見を聞き合うことなどを大切にする中で、学級内に自然とお互いの考えを尊重し合う雰囲気が出てきたように感じる。また、生徒会活動として「いじめ」に関する自作資料をつくり、みんなで考え合いたいという生徒も出てきている。

その他、道徳の時間の充実に向けて、学年教員間の連携がより密になったことや、学年会議で毎回道徳の時間の進め方の確認を行い、学年全体で指導に当たることができたことも成果として挙げられる。



(自作資料による生徒会活動)

さらに家庭に対しては、学級通信で、道徳の時間の学習内容や生徒たちが書いたワークシートの内容を紹介している。学級懇談会で、「道徳の時間の内容がよく分かり、楽しく通信を読ませてもらっていますよ。」との感想もいただいた。

道徳の時間の充実について取り組んだことが、他の様々な取組やつながりの構築へと広がってきている。今後も研究を継続し、さらに生徒にとって魅力のある道徳の授業づくり、そして学校全体での道徳教育の推進に取り組んでいきたい。

参考・引用文献

- | | | |
|-----------------------------|---------|-------|
| (1) 中学校 心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開 | 文部科学省 | 平成14年 |
| (2) 研究授業 中学校道徳 柴原弘志 | 明治図書出版 | 平成17年 |
| (3) 教育課程部会におけるこれまでの審議の概要 | 中央教育審議会 | 平成19年 |